

月刊

GPP



Vol.69

令和3年7月号

株式会社
グロースパートナーズ

日本は残コンの名手になり得るのか!?

こんなにも梅雨と夏がぱっくりと分かれているのも珍しいのではないか。猛暑がやってきた。と、思ったらオリンピックもグダグダとやってきた。日本勢が金メダルをとったりすると、喉元すら過ぎていないのに、俄然盛り上がってしまうのが日本社会のように思えてならない。

セルドロン事業も大きな局面を迎えている。やはり、事業を開始した時が早すぎたのか・・・

“早すぎる”ということは無いから、満を持していたのであろう。“環境”というテーマは2005年ごろからコマースリズムに乗って、各所で聞くようになった。当時、海外生活をしていた私は、日本に帰って来るたびに異様なまでに環境を叫ぶ家電メーカーのCMにウンザリしていた。なぜなら、その業界にいた身として、言っていることとやっていることに大きな矛盾が散見されたからだ。

それから15年の時が流れて、“カーボンニュートラル”という巨人が出現した。我々の一般社会で最もCO2濃度が濃い場所は車道と言われており、EVへの切り替えが欧州を中心に叫ばれている。フランス・パリでは8月より公道の時速制限が30kmになるそうだ。この辺が感心するのだが、大きなアドバルーンは上げつつも「足元で出来ることから順次実行していこう」というスタンスだ。少し自慢だが、小生も昨年北海道旅行を切っ掛けに、マイボトルを持ち歩いている。そう言えば、無印良品がペットボトルを全てアルミ缶に変更したが、サポートしなくなってしまう。

東京大学・野口先生と安藤ハザマとの共同研究、「生コンにセルドロンを添加し、粒状化させて比表面積を増やしてうえで、CO2の吸収を促進させる」の第一回目の報告がそろそろ出てくる。これはセルドロン事業にとっても間違いなく大きな一歩である。いわゆる“残コン”と呼ばれて厄介ものであったものが、一転して現代の悪者“CO2”を固定化するツールになるのである。我々が事務局を務めるRRCSでは、残コン分科会を立ち上げ、各種問題を解決しながら規格化・標準化を図ることになっている。

例えグダグダであったとしても、決まった瞬間にキリっとするのが日本の国民性なのかも知れない。オリンピックの金メダルの様に、残コンに対する規格や標準が完成した際には、世界における“残コン”の名手になっているのかも知れない。

藤井 成厚

